第72回定時株主総会招集ご通知に際しての
インターネット開示事項

連 結 注 記 表
個 別 注 記 表

（平成30年4月1日から平成31年3月31日まで）

令和元年６月１日

ソーダニッカ株式会社

「連結注記表」及び「個別注記表」につきましては、法令及び当社定款第16条の規定に基づき、インターネット上の当社ウェブサイト(http://www.sodanikka.co.jp)に掲載することにより、株主の皆様に提供しております。

連 結 注 記 表

Ⅰ 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

１．連結の範囲に関する事項

連結子会社の数　7社

連結子会社の名称：　ソーダニッカビジネスサポート(株)
曹達日化商貿（上海）有限公司
PT.SODA NIKKA INDONESIA
(株) 日本包装
SODA NIKKA VIETNAM CO.,LTD.
モリス（株)
(株) 日進

２．連結子会社の事業年度に関する事項

連結子会社のうち、曹達日化商貿（上海）有限公司、PT.SODA NIKKA INDONESIA及びSODA NIKKA VIETNAM CO.,LTD.の決算日は12月31日であります。連結計算書類作成の基礎となる計算書類を作成するに当たっては同日現在の計算書類を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

３．会計方針に関する事項

（１）重要な資産の評価基準及び評価方法

①有価証券

その他有価証券

・時価のあるもの

連結会計年度末日の市場価格等に基づく時価法によっております。

なお、評価差額は全部純資産直入法により処理しており、売却原価は移動平均法により算定しております。

・時価のないもの

移動平均法に基づく原価法によっております。

②デリバティブ取引により生じる正味の債権及び債務の評価基準及び評価方法

時価法によっております。

③たな卸資産

商品及び製品は移動平均法に基づく原価法(収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）によっております。

（２）重要な減価償却資産の減価償却の方法

①有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、平成 10 年４月１日以降取得した建物（建物附属設備は除く）並びに平成 28 年４月１日以降取得した建物附属設備及び構築物については定額法によっております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物	３～４７年	構築物	７～６０年
車両運搬具	４年		

②無形固定資産（リース資産を除く）

自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（５年）に基づく定額法によっております。

③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

（３）重要な引当金の計上方法

①貸倒引当金

売掛金等の債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

②賞与引当金

従業員賞与の支給に備えるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度において負担すべき額を計上しております。

③役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度において負担すべき額を計上しております。

（４）退職給付に係る負債の計上基準

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10 年）による定額法により按分した額を、それぞれその発生時より費用処理しております。

（５）重要な外貨建ての資産または負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、連結会計年度末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

なお、在外連結子会社の資産及び負債は、連結会計年度末日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めております。

（６）重要なヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。

なお、為替予約について振当処理の要件を満たしている場合は、振当処理を行っております。

②ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建取引（金銭債権債務、予定取引）をヘッジ対象とし、為替予約をヘッジ手段として用いております。

③ヘッジ方針

外貨建取引の為替変動リスクをヘッジするために為替予約取引を用いており、外貨建取引（金銭債権債務、予定取引）の範囲内で為替予約を行っております。

④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段に関する重要な条件がヘッジ対象と同一であり、ヘッジ開始時及びその後においても継続して相場変動が完全に相殺されるものであると想定することができるためヘッジの有効性の判定は省略しております。

（７）消費税等の会計処理

消費税等は税抜方式によっております。

４．未適用の会計基準等

・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第 29 号　平成 30 年３月 30 日）
・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第 30 号　平成 30 年３月 30 日）

（１）概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の５つのステップを適用し認識されます。

ステップ１:顧客との契約を識別する。
ステップ２:契約における履行義務を識別する。
ステップ３:取引価格を算定する。
ステップ４:契約における履行義務に取引価格を配分する。
ステップ５:履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

（２）適用予定日

令和４年３月期の期首より適用予定であります。

（３）当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結計算書類の作成時において評価中であります。

５．表示方法の変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第 28 号　平成 30 年２月 16 日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

Ⅱ 連結貸借対照表に関する注記

1．　担保提供資産

(1)	建物及び構築物	0	百万円
	土地	34	百万円
	計	35	百万円
対応債務	短期借入金	1,600	百万円
(2)	投資有価証券	3,410	百万円
対応債務	支払手形及び買掛金	11,828	百万円

2．　有形固定資産の減価償却累計額　2,666　百万円

3．　「土地の再評価に関する法律」(平成 10 年 3 月 31 日公布法律第 34 号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(平成 13 年 3 月 31 日改正)に基づき、事業用土地の再評価を行い、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価の方法 … 「土地の再評価に関する法律施行令」(平成 10 年 3 月 31 日公布政令第 119 号) 第 2 条第 4 号に定める路線価及び路線価のない土地は第 2 条第 3 号に定める固定資産税評価額に基づいて、合理的な調整を行って算出しております。

再評価を行った土地の当連結会計年度末における時価と再評価後の帳簿価額との差額（時価が帳簿価額を下回る金額）　…… 321　百万円

4．　期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、当連結会計年度末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が、期末残高に含まれております。

受取手形	840	百万円
支払手形	117	百万円

Ⅲ 連結株主資本等変動計算書に関する注記

1．発行済株式の種類及び総数に関する事項

普通株式　25,168,000　株

2．自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増　加	減　少	当連結会計年度末
普通株式(注)	226,175 株	1 株	―	226,176 株

(注) 増加数の内訳は次のとおりであります。

単元未満株式の買取による増加　1 株

3．配当に関する事項

（1）配当金支払額

決　議	株式の種類	配当の総額	1 株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成 30 年 5 月 10 日 取締役会	普通株式	174 百万円	7.00 円	平成 30 年 3 月 31 日	平成 30 年 6 月 27 日
平成 30 年 11 月 5 日 取締役会	普通株式	174 百万円	7.00 円	平成 30 年 9 月 30 日	平成 30 年 12 月 3 日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生が翌連結会計年度となるもの

決　議	株式の種類	配当の原資	配当の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
令和元年5月9日 取締役会	普通株式	利益剰余金	174百万円	7.00円	平成31年3月31日	令和元年6月26日

Ⅳ 金融商品に関する注記

1．金融商品の状況に関する事項

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、銀行等金融機関からの借入により資金を調達しております。

受取手形及び売掛金に係る顧客の信用リスクは、与信管理規定に沿ってリスク低減を図っております。また、投資有価証券は主として株式であり、上場株式については四半期ごとに時価の把握を行っております。

借入金の使途は運転資金であります。

デリバティブは、海外取引における為替変動リスクを最小限にとどめ、利益管理を適切にするために行うもので、先物為替予約を外貨の使途が明らかな場合のみ行っております。

2．金融商品の時価等に関する事項

平成31年3月31日（当期の連結決算日）における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額（*1）	時価（*1）	差額
（1）現金及び預金	9,281	9,281	―
（2）受取手形及び売掛金	38,011	38,011	―
（3）投資有価証券			
その他有価証券	11,164	11,164	―
（4）支払手形及び買掛金	(29,508)	(29,508)	―
（5）短期借入金	(5,071)	(5,071)	―
（6）デリバティブ取引(*2)	(1)	(1)	―

(*1) 負債で計上されているものについては、(　　) で示しております。

(*2) デリバティブ取引は、債権・債務を差引した合計を表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

（1）現金及び預金、並びに（2）受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

（3）投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の相場によっております。

（4）支払手形及び買掛金、並びに（5）短期借入金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

（6）デリバティブ取引

これらの時価は、決算期末日における先物為替相場によっております。

(注2) 非上場株式（連結貸借対照表計上額174百万円）及び関係会社株式（連結貸借対照表計上額0百万円）は市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められるため、上表には含めておりません。

Ⅴ １株当たり情報に関する注記

１．　１株当たり純資産額	961 円 12 銭
２．　１株当たり当期純利益	44 円 83 銭

Ⅵ その他の注記

金額の端数処理

百万円未満を切り捨てて表示しております。

個 別 注 記 表

Ⅰ 重要な会計方針に係る事項に関する注記

１．有価証券の評価基準及び評価方法

（１）関係会社株式

移動平均法に基づく原価法によっております。

（２）その他有価証券

・時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法によっております。

なお、評価差額は全部純資産直入法により処理しており、売却原価は移動平均法により算定しております。

・時価のないもの

移動平均法に基づく原価法によっております。

２．デリバティブ取引により生じる正味の債権及び債務の評価基準及び評価方法

時価法によっております。

３．たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品は移動平均法に基づく原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）によっております。

４．固定資産の減価償却の方法

（１）有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、平成 10 年４月１日以降取得した建物（建物附属設備は除く）並びに平成 28 年４月１日以降取得した建物附属設備及び構築物については定額法によっております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物	３～４７年	構築物	７～６０年
機械及び装置	７～１７年	車両運搬具	４年
工具器具備品	２～２０年		

（２）無形固定資産（リース資産を除く）

自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（５年）に基づく定額法によっております。

（３）リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

５．引当金の計上方法

（１）貸倒引当金

売掛金等の債権の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

（２）賞与引当金

従業員賞与の支給に備えるため、将来の支給見込額のうち当事業年度において負担すべき額を計上しております。

（３）役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、将来の支給見込額のうち当事業年度において負担すべき額を計上しております。

（４）退職給付引当金

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10 年）による定額法により按分した額を、それぞれその発生時より費用処理しております。

６．ヘッジ会計の方法

（１）ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。

なお、為替予約について振当処理の要件を満たしている場合は、振当処理を行っております。

（２）ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建取引（金銭債権債務、予定取引）をヘッジ対象とし、為替予約をヘッジ手段として用いております。

（３）ヘッジ方針

外貨建取引の為替変動リスクをヘッジするために為替予約取引を用いており、外貨建取引（金銭債権債務、予定取引）の範囲内で為替予約を行っております。

（４）ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段に関する重要な条件がヘッジ対象と同一であり、ヘッジ開始時及びその後においても継続して相場変動が完全に相殺されるものであると想定することができるためヘッジの有効性の判定は省略しております。

７．退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結計算書類におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

８．消費税等の会計処理

消費税等は、税抜方式によっております。

９．表示方法の変更

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第 28 号　平成 30 年２月 16 日）等を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

Ⅱ 貸借対照表に関する注記

1． 担保提供資産

(1)	建物及び構築物	0	百万円
	土地	34	百万円
	計	35	百万円
対応債務	短期借入金	1,600	百万円
(2)	投資有価証券	3,410	百万円
対応債務	支払手形及び買掛金	11,828	百万円

2． 有形固定資産の減価償却累計額 2,226 百万円

3． 偶発債務

保証債務 31 百万円

子会社 曹達日化商貿(上海)有限公司の金融機関からの借入債務に対し、保証を行っております。

4． 関係会社に対する債権・債務 短期金銭債権 405 百万円

短期金銭債務 41 百万円

5． 「土地の再評価に関する法律」(平成 10 年 3 月 31 日公布法律第 34 号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(平成 13 年 3 月 31 日改正)に基づき、事業用土地の再評価を行い、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価の方法 … 「土地の再評価に関する法律施行令」(平成 10 年 3 月 31 日公布政令第 119 号) 第 2 条第 4 号に定める路線価及び路線価のない土地は第 2 条第 3 号に定める固定資産税評価額に基づいて、合理的な調整を行って算出しております。

再評価を行った土地の当事業年度末における時価と再評価後の帳簿価額との差額（時価が帳簿価額を下回る金額）

…… 321 百万円

Ⅲ 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高

営業取引による取引高		
売上高	1,575	百万円
仕入高	238	百万円
その他の営業取引高	673	百万円
営業取引以外の取引による取引高	0	百万円

Ⅳ 株主資本等変動計算書に関する注記

自己株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増　加	減　少	当事業年度末
普通株式(注)	226,175 株	1 株	―	226,176 株

(注) 増加数の内訳は次のとおりであります。
単元未満株式の買取による増加　1 株

Ⅴ 税効果会計に関する注記

1．繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因

(繰延税金資産)		
貸倒引当金	11	百万円
賞与引当金	76	百万円
退職給付引当金	290	百万円
投資有価証券評価損	141	百万円
会員権評価損	8	百万円
その他	75	百万円
繰延税金資産小計	604	百万円
評価性引当額	△186	百万円
繰延税金資産合計	417	百万円
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△1,817	百万円
固定資産圧縮積立金	△31	百万円
繰延税金負債合計	△1,848	百万円
繰延税金負債の純額	△1,431	百万円

Ⅵ １株当たり情報に関する注記

1．	１株当たり純資産額	959 円 50 銭
2．	１株当たり当期純利益	42 円 87 銭

Ⅶ その他の注記

金額の端数処理
百万円未満を切り捨てて表示しております。